

(66)0609 曖昧な生と死 060615 締め切り 060601 提出

生・老・病・死

医学・医療は、比較的近年まで人間の病的状態を集中的に対象としてきたといわれます。しかし、現在では、高齢化社会が現実となって、老化現象にも対応せざるを得なくなっています。さらに、遺伝子工学技術や再生医療などが進歩するにつれていやおうなしに生・生命の問題に関わりができ、臓器移植における脳死問題などから死についても考えなければならなくなっています。すなわち、生・老・病・死の全体に対応しなければならなくなっているといえます。

しかし、少し厳密に考えると、われわれはかなりいい加減な概念で生と死を考えていることに気が付きます。例えば、単に「誕生」といったとき、赤ん坊が母親の胎内から出てくること、すなわち出生を考えます。しかし、医学的に考

えると、胎児が産道を通して母体外に出たときには、まだ、臍帯・胎盤を介して母体につながっていて、子宮内にいるときの状態と変わりはないのです。それでは、臍帯の血流を遮断し、児が独自の循環機能と呼吸機能を活動し始めた時なのでしょうか。はっきりしません。

さらに、頻繁に使われる「新しい生命の誕生」「新しい生命の始まり」などといったときには、生命が新しくできるように感覚的に理解することが多いと思います。「新しい生命の誕生」のきっかけは、精子が卵子内に進入することであるようにも考えられます。しかし、単なる進入ではなく核の融合が必要です。胎児の生命の始まりは、その後の卵子の細胞分裂が始まった瞬間なのでしょうか。さらにその後の心拍動の開始時点なのでしょうか。これらは、現代では科学的に十分理解が可能な事象と考えられます。心拍動の開始時点は、ほかの事象に対しやや異質と考えられるかもしれませんが、胎児を独立した人格をもつと問題にす

る時、米国ではこの時を始まりとすることがあるのです。なぜ、このようなややこしいことを考えるかという、生・生命とは何かについては現代科学的医学では全く説明されず、したがって理解もされず、社会的・哲学的・宗教的などという理解ではない、了解、すなわちお互いの納得があるだけということと関係があります。

しかしここでちょっと考えてみると、このような状況で、実は、生命は新しく作られてはいないのです。誕生、あるいは生まれるとは、不明確な事態を特別な意図をもってこのようなあやふやに表現するためのものなのではないでしょうか。

曖昧さは日本文化

日本においては生と死が、伝統的に曖昧に扱われてきたし、死、あるいは病名についての告知がされてこなかったのは同じ意味からであると考えられます。言葉だけの真実を突きつけるよりも、当事者の多くが口に出して語ることなしに自ら実感して納得・了解するのは伝統

的 日 本 文 化 であるとしかいいいようがなく、ことの
善 悪 とは 関 係 は ない 話 なの です。

生 命 は 生 ま れ ない、継 承 さ れ る だけ

人 間 の 場 合 ，す で に 生 命 を 持 っ た 卵 子 と
精 子 と の 合 体 に よ っ て ，生 命 は 受 け 継 が れ る
(継 承) だ け で ，新 し く で き た も の で は ない の は
明 ら か で す 。 で は ，継 承 を ど ん ど ん と 逆 方 向 に
さ か の ぼ っ て い く と ，厳 密 な 意 味 で ，いつ か は 地
球 上 で 新 し い 生 命 が で き た 瞬 間 が あ っ た は ず
で す 。 わ た し の 理 解 で は ，水 素 ・ 酸 素 ・ 炭 素 ・
窒 素 な ど が 主 体 と な っ て タ ン パ ク 質 ・ 脂 質 ・ 核
酸 な ど の 化 学 合 成 物 が 生 ま れ ，あ る と き ，何
か を き っ か け と し て 偶 然 に 生 命 が 宿 っ た と 考 え
ら れ ま す 。 そ の と き の 状 況 と し て 、海 辺 の 波 打
ち 際 の よ う な 周 期 的 に 揺 れ 動 く 刺 激 が 必 要 で
あ っ た と 指 摘 す る 人 が あ り ま す 。 そ れ が 、心 拍 な
ど に つ な が っ た と す る の で す 。

科 学 で は 、先 行 了 解 事 項 は 不 問

ダーウィンの「種の起源」は、生命が先に存在していることを前提に進化の説明をするだけで、生命の起源にかかわることではありません。先行了解事項は、不問とするのが科学的であることの特長という表現があります。もっとも有名なのは、ニュートンが引力は物質に特有の性質といったことです。それ以来、引力とはなにかについての議論がなくなっていました。

さて、生命が何かについての納得できるような明確な科学的定義はないようですが、生命体が地球以外の宇宙のどこからかきたと考える研究者が結構いるのです。すぐわかることは、それではその地球以外の宇宙で生命が発生したのはどんな状況かということが問題になることです。最近、私が気になっているのは、古代の地球上で生命が発生したのが事実として、現代の地球上のある場所で真の意味の生命の発生が起こることの可能性を否定する理論的、そして実証的根拠はあるのだろうかということです。海辺の活火山の近辺には、古

代の地球と近似する環境がありそうな気がするのですが。。。解っているのは、少なくとも科学的理解が普及した何世紀かにわたって、別の系列の生命の発生の報告はないことです。そんなことに興味をもつ人もいないのかも知れません。

いったん生命体が成立すると、最近では、修飾を受けているようですが、ダーウィンによって説明されたような自然選択（淘汰）進化種の分化が進むと考えられます。

生殖細胞は不死身

ワイスマンによる「体細胞と生殖細胞とが一致している単細胞生物に死はない。分裂によって増殖する単細胞生物は不死身である。（複数の単細胞生物の融合によって発生したと考えられる）多細胞生物では分化が生じ、栄養を担うものと増殖に関与するものとの分業が生じ、新たな個体をつくる力は生殖細胞だけに限定されていく。すなわち生殖細胞

胞だけは不死身」という言葉にしたがうと、生命の継承をよく理解できます¹⁾。

今度は死ぬ時のことを考えてみます。個体の死によって生命は、確実に消失します。しかし、死ぬ前に、生殖細胞を通じて生命を継承させることは可能です。

ついでながら、奇妙なことを発見しました。生後は生まれてから後のことを指し、生前は死ぬ前を意味します。生前は、生まれる前のことではないのです。生後と生前の時間的關係が逆転しています。死後は、死んだ後のことを指していますが、死亡前であっても死前は普通使わないのです。これらの言葉の乱れは何か特別な、たとえば仏教での意味があるのでしょうか。不思議な非対称です。

なぜ生まれ、なぜ死ぬのか

近代科学は、自分とのかかわりを放棄し、すなわち主観性を捨てることによって成立した知識体系といわれます。人間が生まれることや、

死ぬことについては生物学的・医学的，すなわち現代科学的に説明が可能で、一応納得します。しかし、「なぜ私は生まれてきたのか」，「なぜわたしは死なねばならないのか」と自分とのかかわり合いにおいては，科学的に理解することができません。それから先は，現代では，宗教・哲学の問題とされるのです。その中で，現在は「なぜ死ぬのか」に比べて、「なぜ生まれたのか」に対する思索が極端に少ないようです。

小川は，死の意味について「死は種に利益をもたらす出来事とみなされるべきで，生命そのものに本来固有の必然的なものとみなさるべきではない」というワイスマンの言葉を引用し，不死の傷だらけの個体が生き延びるよりは，新たに完全な個体によって置き換えられる方が種にとって有益であるからとしています²⁾。科学哲学的見解といえましょう。

このような死生観は，歴史的・社会的産物ということができ，時代・社会の変貌と共に変化するのが一般的です。日本の伝統的死

生観は、過去30～40年間における国土全体にわたる都市化と核家族化を経て、基盤である家（イエ）・村（ムラ）共同体と、それらにおけるいろいろな通過儀礼が風化したことで、支配力が弱まっているといえます。それでも、伝統的死生観は時に社会の表面に顔を出し、妙に納得されたり、あるいは逆に、そのことが現代の社会通念に合わないものとして当惑されたりするのである。

第二次世界大戦後は日本では、優生保護の名のもとに多くの人工妊娠中絶が行われました。それに対する後ろめたさが、後の水子供養であるといわれます。養老は、人工妊娠中絶が多かったのは、日本では胎児は母親の一部とみなされてきた世間の伝統と関係があり、また、同じような意味で親子心中は極めて日本的と指摘しています。出生前診断と呼ばれるものの1部は、間引きが出生以前に延長したものではないかともいっています³⁾。日本的死生観が意識の深層ではまだ流れてい

ると見るべきなのではないでしょうか。はたまた、新たな水
子供養の原因になるのでしょうか。

文献

1)小川真理子：蘇るダーウィン。p162，岩波
書店，東京，2003年

2)小川真理子：蘇るダーウィン。p161，岩波
書店，東京，2003年

3)養老孟司：人間科学。p141，筑摩書房，
東京，2002年

挿絵：ニューカレドニアの長い白い浜

夕暮れ時になると、現地の子供たちがどこ
からともなく集まってきてサッカーやバレーボール
をします。子犬も一緒になってボールを追いか
けます。人を見ると、必ず手を挙げ、ボンジュール
と挨拶をします。自由で、伸びやか。。。

